



社会課題に挑む変革人材を育成する 「共創プラットフォーム」へ



複雑化する社会課題を見据えた
キャンパス再編と新拠点創出

1639年、西本願寺境内の学寮として産声を上げた龍谷大学は、社会課題の解決に向けて精力的な取り組みを展開し、次代を切り拓く人材を輩出し続けてきた。建学の精神「浄土真宗の精神」に基づき掲げるのは、「自省利他」という独自の行動哲学だ。自己中心性を解きほぐし、他者の苦しみを自分事として思いやり行動するこの姿勢こそ、予測困難な時代に求められる「変革人材」の土台となる。創立400周年となる2039年に向けて、同大学は将来ビジョンを策定した。『まごころMagokoro』ある市民を育み、新たな知と価値の創造を図ることで、あらゆる『壁』や『違い』を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる」ことを目指し、さまざまな改革を推進している。

社会課題が複雑化する今、単一の組織で解決を試みることは極めて困難である。そこで同大学は、行政・企業・市民と目標を共有し、協力し合う「コレクティブ・イン

パクトの創出」を合言葉に3キャンパスの機能を再定義。2027年4月にキャンパス名称の変更を行う。歴史・宗教、文化・芸術、多様性・国際性を特色とする京都府下の2キャンパスは、人文科学の知が結集する「京都大宮キャンパス（現・大宮キャンパス）」

と、社会科学の知が交差する「京都深草キャンパス（現・深草キャンパス）」へ。そして豊かな自然に恵まれた滋賀県のキャンパスは、地球環境課題を解決するための活動拠点「びわ湖大津キャンパス（現・瀬田キャンパス）」となる。

さらに2028年春には、京都駅前に産・学・金が連携するイノベーション拠点「共創HUB京都（仮称）」を開設予定だ。大阪ガス都市開発、京都信用金庫と連携して運営する施設で、サテライトキャンパスや学生寮、シェアオフィス等を備え、共創を促す仕掛けが施される。産・学・金それぞれの強みをシームレスにつなげ、社会課題解決を担う人材の成長と、研究シーズの社会実装を加速させる狙いだ。龍谷大学は単なる教育機関という枠を超え、世界を変革する「共創プラットフォーム」へと進化を遂げていく。

先進技術と社会課題を接続する
びわ湖大津キャンパス

気候変動をはじめとした地球規模の環境問題は、現代の最重要課題の1つである。龍谷大学は、『摂取不捨』（すべての者をおさめとつて見捨てない）という仏教の考え方と「誰一人取り残さない」社会の実現を目指すSDGsの理念を共鳴させ、独自のアプローチ「仏教SDGs」の下で多様な活動を展開してきた。「カーボンニュートラル宣言」や、日本の大学で初となる「ネイチャーポジティブ宣言」

を発出し、持続可能な社会の実現に貢献している。その中核となるのが、びわ湖大津キャンパスだ。自治体や地域、企業と緊密に連携し、地球環境課題を解決する「グリーン・コレクティブ・インパクト」の拠点到位置付けられている。滋賀県は、豊かな自然と市民主体の環境保全活動が根づく場所で、ネイチャーポジティブ（自然再興）を社会実装するためには最適なフィールド。滋賀県、環境省、島津製作所、Dagis エナジー、ソフトバンク他多数の自治体・企業

と協働し、先進技術と社会課題の接続を狙う。目指すのは、環境・社会・経済の「三方よし」の視点を持ち、ビジネスの世界でリーダーシップを発揮する、次世代のグリーン・サステナ人材の育成だ。そのため、2029年にかけて、農学部の実験実習施設や研究者長期滞在施設などを含む大規模な施設拡充を行い、さらなる研究・教育環境の強化を図る。



2学部を新設し、
さらに強固となる学部間連携

びわ湖大津キャンパスでは、2027年4月に2つの新学部「情報学部」「環境サステナビリティ学部」を開設予定である。地球規模の環境問題解決に向けては大規模かつリアルタイムな環境データの取得が不可欠だが、

社会構造の急速な変化によりデジタル・グリーン分野の人材が不足している。この社会的要請にこたえるべく、びわ湖大津キャンパスを再設計し、新たな担い手の育成に取り組むという。

情報学部では、情報にさまざまなテーマを掛け合わせ、社会課題の解決に挑む実践・応用力を備えた人材を育成する。情報メディア、知能情報システム、実践データサイエンスの3専攻を設け、学生個々の興味や得意分野を活かせる学びが提供される予定だ。3専攻を横断する「未来共創ラボ演習」では、低年次から複数の研究室で経験を積み、分野横断的な知と研究活動に欠かせない技術を修得する。さらに、ソフトバンクとの連携による最先端の学びにも期待が集まる。

もう1つの環境サステナビリティ学部は、課題解決に実践的に取り組む次世代の環境人材を育成する学部だ。5つの専門教育プログラム（地域デザイン、ネイチャーポジティブ経営、生物多様性回復、資源循環利用、持続的水資源管理）を設け、学生が文理の枠を超え、得意分野や興味にあわせて選択できる。さ

University Information

龍谷大学 Ryukoku University

■大宮キャンパス 〒600-8268 京都府京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1
■深草キャンパス 〒612-8577 京都府京都市伏見区深草塚本町67
■瀬田キャンパス 〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

URL: <https://www.ryukoku.ac.jp/>

※2027年4月にキャンパス名称を変更
大宮キャンパス→京都大宮キャンパス
深草キャンパス→京都深草キャンパス
瀬田キャンパス→びわ湖大津キャンパス



共創事例 1

環境DNA分析による生物多様性保全総合指数(BCCI)開発

世界的な潮流となっている「ネイチャーポジティブ」。生物多様性の保全は、あらゆる事業活動において避けて通れないテーマだ。しかし、その実現には、自然資本を適切に評価する仕組みが欠かせない。これまで自然の豊かさを客観的に測る世界共通の指標は存在せず、従来の生物調査は時間とコストがかかるため、保全活動の効果を迅速に判断することは困難だった。一連の課題を打破するのが、龍谷大学生物多様性科学研究センターが、滋賀銀行・東近江三方よし基金と連携して研究開発を進める「生物多様性保全総合指数(BCCI: Biodiversity Conservation Composite Index)」である。これは、現場の水や土壌を採取するだけで生息する生物を網羅的に特定できる「環境DNA分析」で得たデータと、

数理科学を掛け合わせた指標だ。単なる生物種数だけではなく、生態系の機能や特定地域における生態系の強靱性などを客観的な総合スコアとして可視化し、地域間や経年での客観的な比較を可能にする。重要なのは、これが単なる学術研究にとどまらず、社会・経済活動への実装を目指している点だ。BCCIを活用することで、自然に配慮した企業への優遇融資や、効果の高い保全活動へ優先的に資金を回す成果連動型の支援など、新たな資金循環を生み出せる。最先端のテクノロジーと地域・金融によるコレクティブ・インパクト。大学の知見が結節点となり、環境・社会・経済の「三方よし」を持続可能にする新たなエコシステムが、滋賀県を舞台に始動している。



※滋賀県が実施する令和7年度「大学連携研究プロジェクト事業研究業務委託」として実施したものです。

共創事例 2

人工衛星データを用いた社会課題解決

超小型衛星開発の先駆者であるアークエッジスペースと包括連携協定を締結し、衛星データを活用したサステナビリティ実現に向けた取り組みをスタートした。「情報学部」「環境サステナビリティ学部」が企業と連携し、森林保全や地すべり等の防災、持続可能なまちづくりなどの具体的な課題解決に挑む。さらに「共創HUB京都(仮称)」での新たな事業創出も視野に入れている。大学の知見と企業の最新テクノロジーを融合させ、豊かな未来の創造を推し進めていく。



超小型衛星の模型

「自省利他」の精神で共創し、
未来の「三方よし」を実現する

らに、環境省から現役職員を教員として招聘し、最新の環境政策の動向を学べる講義も提供するという。目玉である「クエスト科目群」では、琵琶湖などのフィールドに飛び込む。4年間を通して学びと実践を往還し、「考える力」「動く力」「つなぐ力」を育む体験・共創型PBL(Project Based Learning)を展開する。

前述の2学部に加え、びわ湖大津キャンパスには先端理工学部(2027年4月に理工学部(名称変更))と農学部が設置されている。先端理工学部は、開設以来強みとしてきた実験・実習重視の教育を継承・発展させ、学生が自由に活動できる「R-Gap」と呼ばれる3カ月の期間を設定。研究活動や留学、インターンシップなどを後押ししている。また、2022年に完成した「STEAMコモンズ」は、3Dプリンタやレーザー加工機といった最新工作機器を設置しており、学生のものでづくりの拠点となっている。一方、2025年に開設10周年を迎えた農学部は、2022年度より先端理工学部と協働し、低炭素社



アグリDXの実習

会を実現するデジタルマインド・スキルを持った「アグリDX人材」の育成に取り組んでいる。農業用ドローンや自動操舵トラクターの操作、クラウドコンピューティング技術を実践的に学びながら、次代のニーズに応える力を培っていく。これら自然科学を中心とする4学部が1つのキャンパスに統合的に配置されることで、学部を超えた連携教育の基盤がさらに盤石なものとなる。びわ湖大津キャンパスは、地球規模の環境課題を解決するための新たな教育・研究体制の要として、大きな役割を果たしていく。デジタル・グリーン領域は成長分野であり、幅広い業界から高いニーズがある。龍谷大学から羽ばたく変革人材が、日本の産業を牽引し、社会課題を解決する日

も遠くないだろう。

共創で世の中を変革する人材に不可欠な素質を育む大学へ

複雑化する社会課題に対峙し、コレクティブ・インパクトの創出を目指して変革を進める龍谷大学。「分業」が「分断」となっていた現代において、共創の現場で真に求められるのは、他者への関心を持つて分野を「越境」し、組織・分野で異なる言語を「翻訳」してつなぎ、利他の心で「共に支え合う」ことができる人材である。こうした素質を育むには、多様な組織が同じ目標を共有し、それぞれの強みやノウハウを活かして達成を目指す場での学びが必須だ。同大学は、異なる組織をつなぐ「問い、知識、フィールド」等を提供し、異なる思いを持つ人々をつなげ、共創の場をデザインする存在となるだろう。社会と大学との結節点としての共創プラットフォーム。社会課題解決に挑み、未来を創出する龍谷大学発の人材は、どのように時代を変革するのだろうか。今後の展開から目が離せない。

新学部就任する企業人からのコメント



「未来版三方よし」の
担い手を社会へ

今後の企業経営には、環境・社会・経済の調和を保つ「未来版三方よし」の視点が不可欠です。多様な知が集まる龍谷大学で、変革人材が生まれることを心待ちにしています。

北村 暢康
サントリーホールディングス(株)
サステナビリティ経営推進本部
シニアアドバイザー
環境サステナビリティ学部 教授



AI/DX時代を
率いる人材輩出に期待

今、社会で問われるのは、AI等の技術を使いこなす力に加え、データを基に人や組織を動かし、価値へとつなげる実行力です。龍谷大学の人材育成に大きな期待を寄せています。

宮内 謙
ソフトバンクグループ(株)
取締役
情報学部スーパーバイザー